

16) 口唇裂はどう描かれてきたか

Iconology of the Image of Cleft Lips

宗像市 竹原直道

Tadamichi Takehara, *Munakata City*

背景：レヴィ＝ストロースによると、口唇裂は双生児の始まりであって、口唇裂をもつ人間は、まだすっかり二つに分けられず、善と悪の対立が同一人物中に合体した存在だ、とみなす神話が南北アメリカ先住民の間に存在したという（1977年の講話、『神話と意味』1996）。彼はこれを世界中で共通にみられる神話であるとする。しかし日本には口唇裂と双生児を同一視する観念はないと思われた。これに対し板橋作美は口唇裂と双生児を関連付けた日本の伝承事例を丹念に収集し、口唇裂と双生児との関連が日本にも存在することを報告した（「兎唇と双子」東京医歯大教養部研究紀要1998）。ところが2005年、6世紀前半に造られた和歌山市・大日山35号墳より頭の前後に顔が二つある、いわゆる「両面宿儺」の埴輪が全国で初めて出土した。一面は、埴輪の人物像には珍しい厳しい表情をしており、もう一面は、穏やかな表情だが明らかな口唇裂が刻まれていた。これはレヴィ＝ストロース説そのままの造形であるといえる。一方中国漢代の俑に、口唇裂はないが頭の前後に顔のあるものが出土しており、仮面を被った方相氏として紹介されている（図録『仮面の考古学』2010、コラム）。この造形は古代ギリシャの酒杯にもあり、各々飲酒の前後の精神状態を示したものである（図録『大英博物館古代ギリシャ展』2011）。頭の前後に二面の顔がある、いわゆる「両面宿儺」をどう解釈するのか、仮面か双生児かあるいは飲酒による人格の変化か、両面宿儺に関する初出の文字資料である「日本書紀」とも関連して興味深い。キーワードは口唇裂である。日本人を始めモンゴロイドの口唇・口蓋裂の発生頻度は、コーカソイドや、ネグロイドに比べて高いといわれており、500人に1人の割合であるという。口唇・口蓋裂は古代から一定の頻度で発生していた。それは当時の人々によってどのように認識され、表現されてきたのだろうか。

口唇・口蓋裂の歯科医史学的研究にはいくつかの報告がある。例えば山田平太は、「訓蒙図彙」に描かれた兎唇について報告しているし（歯界展望1966）、谷津三雄らは大正期の畸形児写真図譜について考証している（日本歯科医史誌1978）。しかし口唇裂図像の時代的変遷と図像学的意味を俯瞰した報告は見当たらないようである。

目的：そこで演者は古い絵画や塑像といった造形物のなかに、口唇・口蓋裂の事例を探ってみることにした。ただし口蓋裂は外貌に現れず絵画・塑像では表現しにくいことから、実質的には口唇裂の表現に限定される。数は少ないが、これらの口唇裂図像について初歩的な考察を試みたい。

結果と考察：縄文期の土偶には、口唇裂が表現された像が存在する。例えば山梨県上黒駒遺跡出土の土偶には正中口唇裂があるが、春成秀爾は人よりもむしろ擬人化された動物（山猫か）、またはその仮面である可能性が高いとする（『仮面』2002）。ところがもし大日山埴輪の起源がレヴィ＝ストロース説に基づくものであるとすると、この埴輪のイメージの発生は大陸からの伝播があらうとなかろうと、アメリンドとモンゴロイドが分岐する以前に溯ることになる。つまり上黒駒土偶の口唇裂は動物の口の表現ではなく、人の口唇裂の表現であるという可能性も否定できなくなる。ほかの土偶も口唇裂かどうかの視点で見直しが必要となろう。

弥生期・古墳期の土偶、埴輪になると、明らかに片側性の口唇裂像と思われるものが存在する。しかもそれらは大日山埴輪を含めて巫覡像と思われる。弥生後期から古墳時代にかけては、クニの形成期であり戦争の発生期でもあった。口唇・口蓋裂のある子どもにとって戦争や飢餓は生存にとって不利であるにもかかわらず、むしろこの時期の巫覡像に口唇裂が散見されることは興味を引く。あるいは口唇裂を持つ子どもはより神に近い

存在とみなされていたのだろうか。

平安期以降には明らかな人の口唇裂図像を見つけることは難しくなる一方、鬼瓦などには正中口唇裂が見られる。これは動物の擬人的表現と思われる、人の口唇裂とみなすことは難しい。もし縄文・弥生期の口唇裂患者が神に近い存在であるとすると、17世紀の「訓蒙図彙」の「兎唇」者が、「侏儒」（小人症）・「駝背」（くる病）者とともに神

人として描かれているのは、意味のあることに違いない。あるいは神人は相互扶助システムとして機能していたのだろうか。更に江戸期の妖怪絵巻には口唇裂として描かれた人タイプの妖怪が散見されるようになる。今後この口唇裂を見る眼差しの変化に注目しつつ、口唇裂に関する神話、民間伝承、考古資料を収集し、諸外国の事例とともに、更に追及して行きたい。